



【伝え】 第20号 1997年3月

発行 日本口承文芸学会

〒150 東京都渋谷区東4-10-28
國學院大学文学部 伝承文学研究室内
☎03-5466-0224

学会への提言

臼田 基五郎

閑談のつもりで聞いて下さい。昭和49年6月にフィンランドのヘルシンキで第6回口承文芸国際会議が開催されました。この会議に出席した私は、往復の機内で韓国の崔仁鶴君と一緒にになり、このような国際会議を東洋で開ければと話し合いました。崔君は早速、昭和51年5月に韓国江陵市の関東大学で東北アジア民俗学シンポジウムを企画し、関敬吾さん（故人）、直江広治さん（故人）、大林太良さん、私を報告者として招いてくれたのです。関さんは病気で出席できませんでしたが、その江陵で私たちは日本にも口承文芸学会を作るということで意見が一致しました。

こうして昭和52年5月24日に日本口承文芸学会が誕生したのです。設立以来、20年がたちました。この機会に、会員の方に、もう一度考えていただきたいことがあります。

第一は、口承文芸の国際会議を日本で開いて欲しいということです。第二は、その前段回として口承文芸研究資料センターを早急に作らなければならぬということです。第三は、学会には専門の大事典が必要

ですから、『口承文芸大事典』を刊行すること。出版社は簡単には引き受けないでしょうから、自前で編集プランを作成してから出版社と交渉するとか、学会を援助してくれるような財団から寄付を受けて編集するとか、いくつか方法があるのではないかでしょうか。

これが、いうならば、大目標ですが、この1～2年でいえば、学会として口承文芸における歴史性を見つめ直して欲しいので口承文芸の歴史性追求のシンポジウムをやってほしいと思っています。1月に福田晃君が文献と民俗を駆使した『神話の中世』（三弥井書店）という本を出しましたのでこれを基にすると良いでしょう。観念的、形式的なシンポジウムは面白くないですから。また、これが出来る国は世界でも少ないので、ぜひ、文献も豊富な日本でこのシンポジウムをやって欲しいのです。さらには、上海で中国の民間故事集成が続いて出版されていますが、こういう本を機関誌や会報で紹介して欲しいという気持ちもあります。

(口述筆記一編集部)

第21回 日本口承文芸学会 大会のお知らせ

月日 平成9年6月7（土）～8（日）日

場所 常葉学園短期大学（静岡県）

公開講演・シンポジウム・
研究発表・会員総会・懇親会
などを予定しています。
詳細は後日お知らせします。

第32回研究例会発表要旨 ('96.10.19)

葬歌とシマウタの生成

—奄美・徳之島の事例から—

酒井 正子

徳之島には一般庶民のための豊富な葬歌群が伝承され、歌謡の生成・発展を考える上で重要な示唆を与える。すべて無伴奏で歌われ、葬儀の〈供養歌〉から死後の〈哀惜歌〉まで様々な曲種がある。ここでは短詞型歌謡である〈哀惜歌〉がシマウタ(あそび歌、掛け歌、三味線歌)の有力な源泉の一つであることを示し、その生成過程を検証する。

〈哀惜歌〉は、葬儀の直後、故人の近親者が、どうしても紛らせない寂しい思いを口ずさむ。未だ周囲に留まる死者の靈との歌掛けともとれる状況で、代表的な曲は《やがま節(やがまし)》と《二上り節(にあがまし)》である。《やがま節》はタブー性が強く、旋律も歌詞も一人一人異なる個人様式の曲で、現在は殆ど廃れている。一方《二上り節》は〈哀惜歌〉として歌われるほか何十年も経て死者を思い出す時、また自らが逝く状況へと循環しながら繰り返し歌われ、さらに旅送りや婚礼の別れも歌う。《やがま節》を込み込む形で成立したスケールの大きな曲で、今日代表的なシマウタとして広く親しまれている。

旋律的には、《やがま節》は上下句同旋律の反復的な構成が基本だが、同一性が弱く、個人差が大きい。一方《二上り節》は集落共有のフシが確立し、上句部分の旋律は《やがま節》と似るが、下句部分は独自に展開する。前者のアルカイックな反復性に対し、後者は一節ごとの区切りが明確で、有節的、通作的な音楽様式が確立しているのである。さらに《やがま節》と関連の深い他のシマウタも含めて比較考察すると、後バヤシを付加して区切りを明示し、合いの手のハヤシをはさむなど、個人的な〈哀惜歌〉から一般的な歌掛けのあそび歌への展開が、明確に跡づけられる。

ところで、死や悲憤、痛恨などを歌う〈哀惜歌〉の伝統は、実は琉球弧全域にベーシックにみられる。ナークニー、トウバラーマ、スンカニなどの代表的な短詞型歌謡は、いずれも〈哀惜歌〉との関わりが深く感じられるが、それらの検証は今後の課題としたい。(東京都)

第32回研究例会発表要旨 ('96.10.19)

アイルランドにおける語りの伝統

—ケルトの古歌『プランの航海』をめぐって—

松村 賢一

アイルランドにおける語りの伝統は今日まで脈々と流れているが、詩人は古くから語り部の重要な担い手であった。ケルトの古歌『プランの航海』はこの語りの原点とでもいうべき詩を中心とした最古の伝承のひとつであり、七世紀頃に成立したと考えられている。

この古伝承はプランの異界行の物語であり、生と死をめぐって多くの異界の風景が組み込まれている。ケルトの異界の大きな特徴のひとつは、現世において、人間が妖精に誘われて訪れる事のできる、はるか西方の海上の島、至福の国である。この異界はケルト神話の中で発展してきたものだが、数多くの小島が浮かぶアイルランドの地理上の特色とか、ケルトの民の生活、また中世における聖人巡礼などと深く関わっている。その根底には人間にとて到達不可能な樂土の空間にたいする憧憬と永遠の生への願望がある。そこは黄金の花が咲き乱れ、果実がたわわに実り、銀が降りそそぎ、鳥たちが陽気に歌い、食物と美酒が豊富で、「苦惱もなく、悲哀もなく…病もなく、衰弱もない」不老不死の「女人の国」である。

常世を想起させるこのような異界では、人間はある時期に必ず郷愁の念におそわれる。妖精は異界を離れる者に「アイルランドの地に足を触れてはならない」と警告し、禁忌を与える。異界での3年が現実世界では300年経っている。故郷へ帰還し、舟が岸辺に着いた時、プランの仲間の一人が喜んで飛び降りたとたんに彼は灰と化してしまう。禁忌を破ることによって、彼岸と此岸の時間の落差が一瞬に吹き出す仕掛けになっている。日本の「他界」ということばは死後の世界を意味することが多いが、かつて古代人は海界(うなさか)の彼方に常世の国を想像したことがあり、『古事記』や『日本書紀』などにも常世についての記述が現れている。とりわけ、『万葉集』や『丹後風土記』逸文に現れる浦島子の「眠り」の装置による常世行と帰還、玉厘と禁忌、時間の経過などとケルトの異界の物語の比較考察はすこぶる興味深い。(東京都)

《報告》

東京昔ばなし大学を受講して

小池 ゆみ子

なつ初しれ連一を日な吾しい一、昔や
ばな当席さ日り目がば敬題つるり京館な
昔と、出施2シズ域昔闕とにグあ東書は
る場はが実は1一地京故」承ので。図お
する会に名で義でりた東。感伝せ方る、で
宰。) 153 地講年シつ、た雜のかりいも
主たる山各の31入につ「話聞語てく学校
がれ青た本回、にに期なの昔りのべ多小
氏さ区え日1れで目時と号の語代述のやで
夫講谷越は(さすズたび4代る時と者庫ち
俊開渋に学回講。「し運第現よいだ講文た
澤で(か大2開るり生の)、にし化受の人
小京城るしに)いシ誕講えでち新変の域
秋、東のはな年限て2に開伝中たをの学地
秋がもば、時れ、地は『の親き場大、て
昨年学ど員昔り6さし各学、話母動のし館つ
や大こ定。おでと了の大は談、のりな童語
したのたて続ズ終本し氏たて、ブ語ば児を

にしで都がをさム講のス語の語時はし、と析搔育動れ旨かんの話』、リの」クの論のる時及はか分動子行られ趣「さ代昔ば」グ」法ッ話式承する言ののをののじの例は現のん説「立文マ昔様伝話もたも動心在ち感講実を、本ま再」成のて、を再、にえう行の現たも開(食り)日や法像のりつした方をか術与いのち。徒と学」夕あと方文間集語沿介まり話の技をう公たる生し大門。が国馬の人話「に紹。取昔いな銘ど人もある、まし入義」外『りる童は話をたの、よ的感は主どでち励な法講会では語語ム氏た論し間やが践にとの子点たのば文のくつ目「がり澤げ式示の法葉實者像話のた親へ。昔の)聞よ曰げしぐ小上様をり方言の講間昔代せ母ちた、り」をに2あと。りのか語ぶなど受人、現わるたつは語一り手。りば涯た取イ何、学うな、るでを合す教師目「リ語りたと昔生い、テはずらよ、に語義れし労教で日きいはのら例に弟が義リ口な手どう。話う、照に惱講続こ夜市語実ら兄義講・りみりはどた昔いしにてにる

「力すうこ語話ばのる京をな本とりのな心の都を。いくの昔昔氏い東的けるとい代て。たて（目わい）」て現した。じのみてえし、そしう感学をし伝渡へ、託こと。大し示口手親へとがるうし悪に「に母師へ人い思なし確をちを教ち一てとば善明話た割、た人めい昔のと昔も役へ人一止なは話」、どの者るぶけは氏再とは子そ話わ学受で氏再とは子そ話わ学受で城澤やこれで、再携でにけ小本るそ姿り、に学実だ絵けちのあへ究大確私

《紹介》

『現代伝説叢書』

長野 晃子

て、二本手
よレ望たきい。
にブ待私大
と、がは義
こ版て書義
た力い叢意
れり続説の
さメに伝此
版ア版代
後述即書が
出版のバ現
このヴァロ
ヒのノ本格
ブルの版元に
届けられた。

の現が主集の社本て比ズ半民識易日つ西わ前代意容版、較、に話、に版、よ東問紀現活も版にのを世と生較バと念西20話の比ハツコ通東ら民去の口た会のか典過と一つ社洋半古くれヨ捕、後るづそれ、が識し紀ゆ基の版書意た世わに代カ叢活つ19いれ現リ説生な、たそとメ伝のにてれ、念ア現代人易しさ較、通つ。現代容と録比会

でん本る。でそ読も
米一日ええいり。をでも、
欧タは怯怯多限る。版米ことが、
とのの分靈話知で日、る
る譬ブ自亡ののうとがい
絞復イはす型私そ版向て
を、夕で出」、え米傾つ
的害の本み晩は言欧のま
に被こ日本な話とのこ強
話、、。がんの無書、す
い御くい責こ型皆叢と、ます
怖防多近呵「」は説るす
ば、撃話無心えな米代ても、
例え攻つ皆良例ん欧現べでる。
例、持は、、こ、して比日本
はをで話話「はしみ日本
わかる。

過水はて伝代ナ規シに込今要
較た叢く現80る概ハ取げの
比れのてはぼすに、も広化
西くこげちほ通かくでをを様
東て、広た（流やなまシ粹多
のしがし者代をびでれナの
化による押著時アのけこハ象点
文易あを編同イとだ、た対視
神容で平の「デ」話シきのる
精を書地書、メ田つナて究究い
精を書地書、メ田つナて究究い
に、較叢の叢をや池持ハれ研究て
に、比説研究の語頭（をなさ）話け
うの伝研用口」型うと説説か
よ在代話。うの体話そい間間い
この現現するい）総、りな民民間
との間いと降のしなり、のもの
去社民も説以シ定に足み、後性

民間説話研究者や、口承文芸研究者に必読、必携の叢書である。（東京都）

干J

(書名／編著者／発行所／発行年)
昔話の伝承世界—その歴史的展開と伝播
武田正 岩田書院 1996.3
川崎の世間話 「川崎の世間話」調査団
編 川崎市民ミュージアム 1996.3
語られざるかぐや姫—昔話と竹取物語
高橋宣勝 大修館書店 1996.3
白幡ミヨシの遠野がたり 吉川祐子
岩田書院 1996.4
新六ずんつあんのおもしょ話—宮城県栗駒山麓の民話 佐藤照一・秋山伸司
みやぎ民話の会 1996.6
白田甚五郎著作集第五集一口承文芸研究
おうふう 1996.7
唄ってけらえん 語ってけらえん—只野とよの昔語り 長須賀直子 みやぎ民話の会 1996.7
越後松之山の伝承—『民話と文学』第29号 民話と文学の会 1996.10
山陰の民話 酒井董美 渡部総合プリント 1996.11
口承文学I—『日本文学史』第16巻 岩波書店 1997.1
湯西川のざっとむかし—湯西川の生活と昔話 中本勝則・高橋伸樹 新風社 1997.1
口承文学大概 白田甚五郎 おうふう 1997.1

同志社国文 45号
同志社大学国文学会 '96.12
奈良県立民俗博物館だより Vol. X XIII No. 1
通巻第71号
奈良県立民俗博物館 '96.8
アイヌ民族文化研究センターだより No. 5
北海道立アイヌ民族文化研究センター '96.9
日本音楽史研究 第1号 '96.5
上野学園日本音楽資料室
大島・喜界両島資料叢書
改訂瀬戸市誌編纂委員会 '96.3
地域ニュース No. 4
国立民族学博物館地域研究企画交流センター '96.10
近松研究所紀要 第7号
園田学園女子大学近松研究所 '96.11
昔話の伝承と再生—再話の位置
如月六日／如月六日事務所 '96.9
中種子町昔話集—鹿児島県鹿毛群中種子町一
大谷女子大学説話文学研究会 '96.10

ありがとうございました。今後ともご協力お願い申し上げます。

----- [事務局報告] -----

受贈書リスト

日本民話の会通信 No.126~129
日本民話の会 '96.7~'96.11
国文学研究資料館報 No.46号~47号
国文学研究資料館 '96.3/'96.9
日本民俗学 206~208号
日本民俗学会 '96.5~'96.11
日本民俗学会報・日本民俗学総目録
日本民俗学会 '95.7
民具マンスリー 29巻4~10号
神奈川大学日本民俗文化研究所 '96.7~'97.1

日本口承文芸学会への入会希望者は入会申込書をご請求下さい。
入会金 1000円 年会費 4000円
入会申込書請求先: 〒150東京都渋谷区東4-10-28

國學院大学文学部伝承文学研究室(野村教授)内

日本口承文芸学会事務局 803-5466-0224

送金先: [郵便振替] 00180-4-44834

The Society for Folk-Narrative Research of Japan

c/o Prof. J. Nomura, Kokugakuin University,

4-10-28, Higashi Shibuya-ku, Tokyo, 〒150, Japan

口承文芸に関心のある方を広くご紹介下さい

☆編集担当は、大島廣志・中川裕・中村とも子です。